

つかめて、つかめていないもの。 務川智正

これは演劇作品の劇評なのかといわれると、よくわからないが、この演劇作品をみた観客としての劇に対するものであることは確かだ。演劇感想記である。

名古屋 円頓寺レピリエ。この場所は劇場施設ではなく、街なかにある町屋である。それもこの地域がそうなんだろうが、昭和からの木造住宅が残る一帯である。すぐ近くに昭和からの商店街があり、現在ではおしゃれなカフェや居酒屋が出来、おだやかな庶民的な町並みが残る場所。円頓寺レピリエも古い町屋をそのままの家屋を残して改装し、演劇、ダンス、音楽などのイベントができる小空間である。それは江戸時代、テレビやケータイなどのメディアがない時代落語なら寄席、講談なら講談場と、まちなかにある娯楽場に似ている。魅力なのは、街なかでみる身近さなのだ。

その身近さ空間に、どれだけの引きつけるものが立ち上がるかがこの空間の磁場なのだろうと思う。

さて、そんな劇磁場で、名前のない星プロジェクトで「殺意(ストリップショー)」をみた。ストリップショーの踊り子、緑川美沙のひとり語り芝居である。

時は1950年。終戦から5年後、ナイトクラブで踊り子として語る彼女は20代中ば。10代にまっすぐに時代に抗うひとたちを信じて戦時下を生き抜いて、それに抗う大人たちに憧れて、自分のからだを晒し売っても、なんとも思わずに生き抜いた彼女が殺意を抱く。時代に抗い信じた大人たちが転向して右になり、また、転々向して左になり、自分のプライドだけを守りていく。その偽善やあざとさがみえてきて、裏切られたからだ。まさに正義を信じるものたちの純粋を踏みにじられた怒りなのだ。もちろん、義をつらぬけぬもの怒りは至極まっとう。だが、この戯曲が面白いのは、思想的な転向の怒りではない、この大人たちがただの生きるための表づらにすぎず、憧れの先生が、おぞましい性欲だけの塊で、ゲスな人間で欲を溺れるだけにすぎなかったものをみてしまうのだ。そして、人間というおぞましさを知り、我が身もそうであることに気づくのだ。

まさに、人間という有り様をみせる作品なのだ。

それを田口佳名子という女優はまっすぐにお客をまきこみながら、緑川の生きる逞しさを感じられるものだった。語りもていねいにきっちりしたもので立ち上がっていた。つまり、この物語世界を見せていたし見せ物であった。

でも、それでは演劇は面白くない。文学以上に観ているものをひきつけるものでなくては、それは演劇内に収まるものでしかない。

今回のこの戯曲はまさに戦争に生きた、それも全体主義ではなく、個人として左翼的活動する三好十郎の集団としての左翼批判も入り、人間をみつめた作品だ。でも、私たちはもはや戦争を知的に知っていたとしても時代感覚と理解できたり、想像できたりしてもわかりえない。

現在、世界としては、ウクライナ、ガザなど理不尽な戦争がはじまって情報事実としてわ

かり、怒りから想像してよりいまおこるリアルを伝えるガザモノログをすることは戦争に反対して、平和もとめてつむぐものとして活動することは大切だし、必要な生きることをみつめることだ。

だが、この国が体験した戦争をいまの私たちに感じることはなんなのかは、この芝居ではまだ、たくまられてはいない。そこがみたい。もはや、戦後ではなく戦前になりはじめた世界でなにを描くのか。

可能性を感じたのは、田口佳名子の現実をみるまなざしか。それは緑川の純真な情ある世界を信じているまなざしではなく、現実という未来はないが安定した暮らしのくりかえしの生活に、冷やかな空虚さを放っているまなざしだ。

これは緑川が人間がおぞましく生きる現実にした空虚なまなざしとシンクロする。

裏切られても、あきらめても、冷やかに生きる。こんなくだらなく愚かな人間世界。またくりかえされる同じ過ちに、見切れりながら、見出す生の力を感じるからだ。これは役者だけにできるものではない。演出を含めた作品をつくものたちのあきらめない異なる激世界をみたいものだ。この名前のない星プロジェクトの輝きはまだこれからなのだろう。